
魔法少女と銀の殺戮者

kintoki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女と銀の殺戮者

【Nコード】

N9865T

【作者名】

k i n t o k i

【あらすじ】

殺戮者。とある世界でそう呼ばれた彼は、文字通り殺戮者だった。殺して、殺して、殺して、殺しつくして。そして、死んだ。最後まで殺戮者として蔑まれて。が、死んだはずの彼が見たものは天国でも地獄でもなく、一人の金の少女だった。

ブログ 終わりと始まりの時（前書き）

過負荷な少年少女も終わってないのに、けど我慢が出来ず投下してしまいました。お許しを。

なお、この作品は残酷描写、原作キャラとの恋愛、若干の最強要素が含まれています。それらが苦手な方は今のうちにお戻りください。

超大幅修正しました。

ブローグ 終わりと始まりの時

『もしも、あの時あしっていれば』

所謂、ifの話という奴だ。誰もが一度はそう思うそれは、彼曰く酷くくだらないことらしい。

——どう頑張った所で、その時に戻ることなど出来ない。そう思うくらいならば、最初から後悔の無い選択をすればいいだけの話だ。彼はそう語っていた。

それに、じゃあ、あなたは過去に戻りたいと思ったことは無いのか？ と誰かが言った。その誰かを彼は見つめ、鼻で笑う。

——それは無駄な事だ。例え、何度も過去に戻れたとしても……

——自分は、またこの道を選ぶだろう。

血染めの大地に、滝のような大雨が降り注ぐ。その雨粒を、彼は見
つめていた。蒼の瞳に雨粒が入っている筈だが、既にその感覚すら、
彼には存在しなかった。

その時、彼の体に小さな振動が走る。その振動の先を見ると、誰か
が自分の左胸——つまり心臓だ——から、一本の西洋剣を抜き取っ
ていた。刹那、コップから溢れ出た水のように、傷口から鮮血が溢
れ出す。その量を見て、彼は自らの死が近い事を感じた。

「……痛むか、殺戮者」

小さな声が聞こえた。いや、それとも聴覚がともに機能していな
いのか。とにかく、自分の頭上から声が聞こえた。眼だけそちらに
向けると、そこには鎧を纏った青年が、自分を貫いていた西洋剣を
持つて立っていた。その息は荒く、体中にも無数の傷が見えた。

「……もう、痛みも感じねえよ。俺の痛がる姿が見たかったのか？
残念だったな、このヘタクソ」

「苦しまずに逝けるのだ。感謝してほしいぐらいだな」

「そうですね本当にありがとうございました……これで満足か？」

そう言って、彼は青年を嘲るように笑った。西洋剣を握る手に、力
が籠る。

「最後に言いたい事があるなら聞いてやる」

「あ、そう？　ちよつと待ってろ。今考える……」

そこまで言って、彼は強烈な眠気を感じた。

——ああ、終わりが近いな。

直感的にそれを感じ、笑った。そして、言った。

「……こんな事になるんだったら、もっと殺しときゃ良かったわ」

――何かが、切れる音がした。

「き、さまああああああああああああああああああ！」

!

振り下ろされる西洋剣。本来ならあつという間である筈のそれが、
彼には酷く遅く感じた。

（……漫画で良くある、死ぬ間際に攻撃がスローモーションに見えるあれか）

なら、次は走馬灯か？
 と思つてゐると、彼の頭に今までの思い出が蘇つて来た。

殺して、傷ついて、殺して、傷ついて、殺して、
 傷ついで、殺して、傷ついで殺して傷ついで殺して
 傷ついで殺して傷ついで殺して傷ついで殺して傷つ
 いで殺して傷ついで殺して傷ついで殺して傷ついで
 殺して傷ついで殺して傷ついで殺して傷ついで殺し
 て傷ついで殺して傷ついで殺して傷ついで殺して傷
 ついて殺して傷ついで殺して傷ついで殺して傷つい

――

[illegible]

——そんな繰り返し返しの記憶の中で、彼は見た。自分に向かって微笑んでいる、一人の女性の姿を。夜空のような黒髪に、黒い宝石のような瞳の女性。その女性の姿を確認すると、彼は舌打ちをして、笑う。

「……よお。こんなもんでいいかよ？」

その日、とある世界のとある時間に、一人の殺戮者がその命を散らした。

「……ん」

彼はゆっくりと眼を覚ました。未だ揺れる意識を頭を振って矯正し、今自分のいる場所を見た。そこは、酷く殺風景な部屋だった。必要最低限の物は置かれているが、それだけ。きっと、この部屋の主は無趣味のつまらない奴なんだろうと勝手に結論付け、

「……なんで、生きてるんだ？」

ようやく、自分に起きている異常に気づいた。あの時の事は、はっきり覚えていて。迫り来る刃。駆け巡る走馬灯。殺戮に彩られた過去。そして――

……とにかく、自分が生きているということは絶対にありえない。ならば、ここはどこなのか？

「まさか、ここがあの世っていうんじゃないだろうな？」

まさか、と苦笑していると、扉の前から気配を感じた。

――誰だ？ 考えようとして、すぐにこの部屋の主という結論に至ったため、考えるのをやめた。とりあえず身構えて、扉前の人物の登場を待つことにした。

そして、入ってきたのは――金色の髪をした、一人の少女だった。

「あつ、気がついたんだ。良かった……」

「……お前が、俺を拾ったのか？」

「拾ったって……動物じゃないんだから」

少女は苦笑し、彼に近づく。一瞬いつもの癖で身構えてしまったが、すぐに少女に敵意が無いことを悟り、警戒を解いた。

「それにしても吃驚しちゃった。ジュエ……じゃなくて、探し物をしてたら、君が傷だらけで倒れてたんだよ？」

「……傷だらけ、ねえ」

ふと、あのときの事を思い出す。実は、彼はあの時、心臓に貫つた一撃以外は一発も当たっていなかったのだ。なら、傷だらけというのはおかしい。一体、どういうことなのだろうか？

思考の海に沈みかけて、少女の視線に気づいて意識を戻した。

「……あゝ、そついや礼がまだだったな。まあ、ありがとよ……えつと……」

「あ、ごめんね。自己紹介が遅れて。私はフェイト・テストロッサ。フェイトでいいよ」

「フェイト、ねえ……」

少女、フェイト・テストロッサの名前を聞くと、彼は少し驚いた顔をして、頭を掻いた。

「どうしたの？」

「あゝ、別に。名前の意味が似てたから、ちょっとな……」

頭から手を離し、フェイトを見る。あ、こいつの眼つて紅いのか。などと今更ながらに思いながら、彼は言う。

「……デステイ。ファミリーネームは忘れたから、ただのデステイでいい」

プロローグ 終わりと始まりの時（後書き）

デスティの名前の由来はデスティニー（運命）を短縮したものです。ま、要するにフェイトと同じ意味ってことですよ。……別に知らなくても本編には全く影響ありません。

第1話 『気分なら最悪だ』 (前書き)

第1話投稿。とりあえず、次は過負荷の方を更新します。

第1話 『気分なら最悪だ』

その日、フェイト・テストロッサは使い魔のアルフと共にとあるものを探していた。

それは、ロストログアと呼ばれる次元世界の遺産で、その中でも、持ち主の願いを叶える、といった恐ろしい力を持つ、ジュエルシードと呼ばれる宝石だった。

とある事故で、この町、海鳴市に落ちたそれを、フェイトとアルフは探していたのだが……。

「……見つからないね」

「うん……」

見事に、見つからなかった。この町に来てから、もう1週間近くになる。が、ジュエルシードは見つかる気配も無い。いや、気配はあったのだが、自分達が駆けつけた頃には、とくにその気配は消えていた。恐らく、この町に他の探索者がいるのだろう。そう思って、更に搜索に力を入れているのだが……。

「ホントに、この町にあるのかねえ？」

「ある……筈、なんだけどなあ」

やはり、見つからない。魔力の反応ひとつしないのだ。……この町の人々は、欲望がないのだろうか？ フェイトがそう思うほどに、ジュエルシードの反応は感じられない。

「……なあ、フェイト。もう遅いし、今日はこれくらいにしない？」

「うん……そう、だね。そうしようか」

「そうだよ。もうお腹ぺこぺこだよ。フェイトだってそうだろう」

？」

「えっと、私は、そんなに……あれ？」

突然、フェイトが後ろを振り返った。アルフはそんなフェイトの反応に首を傾げる。そして、アルフが何か言おうとする前に、フェイトは近くの茂みに走り寄る。当然、アルフも慌てて後を追った。

「ちょ、ちょっとフェイト！ どうしたのさ急に？」

「今、何か音がしたような……」

そう答え、茂みの奥へと入っていくフェイト。そして、

「あ、アルフ！ こっちに来て……！」

「あ、ああ！ けど、一体何が……！？」

慌てたフェイトの声に、急いで駆け寄る。そして、見つけた。

病院服のようなものを着た、銀髪の少年を。

「……なんで、ガキがこんなところに？ ねえ、フェイト……？」

「う、うん……けど、この子怪我してるみたいだよ？」

「え？」

良く見ると、確かにその通り。体の所々に傷を追っていて、顔色も少し悪い気がする。その様子を見てフェイトは少し考え……、

「ねえ、アルフ。この子、家に連れて帰ろうよ」

「ほ、本気かい！？　こんな、あからさまに怪しい奴……アタシは反対だよ！」

「けど、このままにもしておけないし……」

そう言うと、フェイトは俯いてしまう。それに、ウツと呻くアルフ。フェイト第一主義のアルフとしては、これはかなりキツイ。そして、暫く唸ると、諦めたように肩を竦める。

「……分かったよ。他ならぬフェイトの頼みだからね」

「あ、ありがとうアルフ！　じゃあ、早速この子を運ばなくちゃ……あれ？」

早速少年を運ぼうと駆け寄ったフェイトは、あるものを見つけた。黒くて細長く、一応取っ手のようなものがついているソレ。首を傾げながら、それを手に取り、取っ手を握り、引いてみた。

「きゃっ……！」

出てきたものに、思わずフェイトはソレを落としてしまった。出て来たそれは、白銀の刃で、月の光を浴びて輝いていた。それが、よりフェイトの恐怖を煽った。

「ど、どうしたんだいフェイト……ってそれ、剣じゃないか。しかも、この世界で言う、カタナって奴だろ？」

「そ、そうなの？　これ、武器だったんだ……」

「にしても、何でコイツ、こんなもん持ってるんだい？」

確かに、言われて見れば変な話だ。この日本という国には銃刀法という法律があるらしく、こういった武器類の所持は全面禁止されて

いると聞いていたのだが、なのにも関わらず、この少年はソレを持っている。しかも、まだフェイトと同じくらいの歳なのにも関わらず、だ。

「……なあ、フェイト。やっぱり、コイツ……」

「駄目だよアルフ。それだけで判断しちゃ」

「うう……分かったよ……」

いかにも、仕方ないと言いたげに、少年を担ぎ、空を駆けるアルフ。それにフェイトも続こうとし、さっきのカタナに目を向けた。

「……やっぱり、持っていたほうがいいよね」

無かったらあの子困るかもしれないし。そんな事を考えながら、刃を出さないように、慎重に刀を手に持ち、アルフの後を追った。

「……デステイ、っていうんだ。うん、宜しくね、デステイ」
「別に、宜しくしたかねえけどな」

「……えつと、どうしてあんなところに倒れてたの？」
「知るかよ。拾ったのはテメエなんだろうが」

「……あの、その……調子、悪いの？」
「気分なら最悪だ」
「あつう……」

……どうしよう。現在、フェイトは内心で大慌てだ。あれから何度か話しているが、デステイはそっぽを向いて、悪態ばかりついている。まさか、自分がなんかしちゃったんじゃない……。そう思い、どこが悪かったのかと自問自答をするようになってしまった。

「……おい、クソガキ」
「ひゃい！　って、クソガキ！？」
「ああそつだよ。テメエ、大人にタメ口とか、舐めてのかよ、ああ？」

「……お、大人？」

改めて、デステイを見る。いつか本で見た、雪の様な白銀の長髪。見ていると吸い込まれるような感覚を覚える蒼眼。睨んでいなければ、少女にも見えるであろう童顔。当然、慎重は自分と同じくらいだ。……大人？

「……ぷっ」
「おい、何笑ってんだテメエ。殺すぞ？」
「い、ごめん！　けど……」

「けど何だよ……あ？」

ふと、部屋にあった鏡を見て、固まってしまった。どうしたんだろ
うか？ フェイトが首を傾げていると、デステイは額に手を当て、
そのままベッドに横になってしまった。

「ど、どうしたの!？」

「寝る。寝て、この訳分からん状況から脱出する」

イマイチ何を言っているのかは分からないが、とにかく眠いのだろ
う。フェイトはそう結論付けて、ゆっくりと扉へと歩いていく。

「じゃ、じゃあ私は行くけど、何かあったらいつてね」

「ああ……どうせ、夢だろうがな」

最後の方は何を言ってるかが分からなかったが、とりあえず、初め
てちゃんとした会話が成立した事に喜び、フェイトは部屋を出る。
出ると、アルフが待っていて、心配そうな視線を向けてくる。

「……どうだった？」

「うん。また寝ちゃった。多分、疲れてるんだと思うよ」

「そっか……じゃあ、フェイトももう寝なよ。夜も遅いしさ」

「分かった。お休み、アルフ」

「ああ、お休みフェイト」

そっいつてアルフと分かれ、自分のベッドに横になる。すると、捜
索の疲れが出たのか、徐々に眠気が襲ってくる。薄れていく意識の
中で、フェイトはデステイの事を考える。あの、常に不機嫌そうな
顔をした、あの少年を。

（明日は、笑った顔が見ればいいなあ……）

そんな事を考えながら、フエイトは眠りについた。

第1話 『気分なら最悪だ』(後書き)

基本、デステイは口が悪いです。まあ、色々あるんですよ、人間には……。

第2話『何偉そうに説教たれてんだ?』（前書き）

ストックがあったからついでに更新。早くも彼女の登場です。

第2話『何偉そうに説教たれてんだ?』

高町なのはは、小学生兼魔法少女である。

元々、ただの小学3年生であつたなのはは、偶然フェレット（偽）を拾い、そのフェレット（偽）、ユーノにジュエルシードの封印を頼まれ、魔法少女となつたのである。

それから、彼女はかなりのびっくりどつきり体験をしてきた。そのため、彼女の度胸は一般9歳児ではありえないほどに据わっている。そんな彼女の胆力も、目の前の光景には、無力と化した。

「……………」

あれはなんだろう。なのははイマイチ状況が理解できず、軽く目を擦る。だが、目に映るものは何一つ変わる事はない。

病院服を着た、銀髪の男の子（多分外人さん）が、公園のベンチに座つて虚空を見つめている。……病院服って事は、病気なのかな？

そんな考えが頭の中に現れ、同時に想像（妄想）がどんどん、頭の中に広がっていく。

最終的に、何故かなのはの中である方程式が出来上がった。

病院服の少年＋ベンチ＋虚空を見つめる目〓余命数ヶ月という事が発覚〓病院を脱走〓今までの闘病が全て無駄〓「俺の人生は何だつたんだ……」〓「鬱だ死のう」

こんな方程式。

「ま、まだ諦めちゃ駄目だよ!!」

気がつけば、なのはは少年の前に立って、そんな事を口走っていた。

デステイは、とある小さな公園にいた。

結局、昨日の事は夢ではなく、自分が生きていて、更には何故か体が子供になっていたという意味不明の事態は全て現実である事を理解した。

が、寧ろ理解しなければよかったと思う。デステイは思わずその場で崩れ落ちてしまった。フェイトとその隣の赤髪の女性（アルフという名だった気がする）が心配そうに何か言っていたが、聞こえなかった。

そして、外に出ると言い、二人の制止も聞かずに外へと飛び出し、今に至る。

（……マジで意味わかんねえ）

一体、どうしてこんな事になったのだろうか？ あれから少し考えて、デステイは四つほど理由を考えてみた。

- 1 二次創作でいう転生というやつにあった
- 2 今までの事は全て夢で、こっちが現実である
- 3 実は殺されずに捕まっていて、変な幻覚を見せられている
- 4 そもそも、今までの事も現在の状況も夢で、まだ目覚めてすらいない

(……馬鹿か俺は)

自分がこんなろくでもない事を考えていたという事実には、転がりまわりたい衝動に駆られた。馬鹿にも程がある。

(中二病か俺は)

大きく溜息を吐き、空を見上げる。蒼く蒼く、透き通った空。普通の人が見れば心安らぐそれは、デステイのささくれ立った心には、寧ろ悪影響を及ぼしていた。

(何で青いんだクソツタレ。見上げてねえで降りて来いよタアコ)

何故か、空に喧嘩を売っていた。空を睨み付けながらぶつぶつと呟くデステイを、近くにいた少年が指差し親に咎められているが、デステイは気づかない。

そんな時だった。

「ま、まだ諦めちゃ駄目だよ!!」

そんな、咎めるような、心配しているような声したのは。ふと、前を見ると、何故かそんなに長くないはずの髪をツインテールで纏めた、茶髪の少女がいた。

(……茶髪?)

はて、と心中で疑問を浮かべる。デステイの知識では、日本人女性というのは全員が黒髪で、ヤマトナデシコとやららしい。いまいちヤマトナデシコとやらがよく分からないが、少なくとも目の前の少女は黒髪ではなく茶髪だ。

……デステイは少しの間考えて、

(……ああ、ヤンキーか)

その結論に至ったと同時に、怒りが込み上げてきた。

(社会不適合者の分際で、なに注意してんだよ。更に諦めるな?なんだ、第五の結論でも考えろってか? ふざけんなよ。俺を中二病患者にしてえのか? ああ?)

完全に被害妄想だが、デステイは止まらない。その怒りを眼力へと変え、

「あ?」

少女を、睨み付けた。

（ひっ！）

心中で、なのはは悲鳴を上げた。それはそうだろう。さっきまで希望の希の字もなかったはずの少年が、この世のあらゆる負の感情を集約したかのような形相で睨みつけているのだから。

（えっ、な、なにこの子！？ も、もしかして危ない子だったの？
……はっ！ ま、まさか、情緒不安定で危険と判断されて精神病院に隔離されてたとか！？）

恐怖が後押ししてか、妄想がどんどん膨らんでいく。そんな事を考えている間に、少年はゆっくりと立ち上がり、なのはに歩み寄る。そして、その頭を鷲掴みにし、そのまま力を籠めていく。

「諦めちゃだめ、だあ？ 何にも分かってない奴が、何偉そうに説教たれてんだ？ ああ？！」

「ご、ごめんなさい！ けど、あの、えっと……」

「大体、人の事言えんのかよこの不良少女が。頭染め直してから出直してきやがれー！」

「あ、頭！？ こ、これ一応地毛……」

「パチこいてんじゃねえぞコラアアアアアアアアアア！！ ネタは割れてるんだよおおおおおおおー！！」

「痛い痛い痛い痛い！！ あ、あたまが割れる！ 割れるうううううううううう！！」

公園に、なのはの断末魔の叫びが轟いた。

……数分後

「え、なに？ それ、マジで地毛なの？」

「さっきからそういつてるのに……」

頭を擦るなのはを、正確にはなのはの髪をマジマジと見つめながら、デステイは心底驚いた、と言わんばかりに目を見開いた。

あれから、ようやくデステイの脅威の握力から開放されたなのはは、必死に地毛である事を説明。最初は嘘だと思い再び頭を掴もうとしたが、なのはの必死さが伝わり、ようやく納得した。

未だなのはの頭には痛みが残っていて、良く見ると涙目だ。よほど痛かったのだろう。

「しょ、初対面の男の子に頭を潰されそうになるなんて、初めての経験だよ……」

「大丈夫だ。俺も初対面の奴の頭を潰しそうになるなんて初めてだ。相子だな」

「全然お相子じゃないよ！！　まだ痛いんだよ！？　あいたたた……叫ぶとまた痛みが……」

「……あゝ」

頭を抱えるのはを見て、少しは罪悪感を覚えたのだろうか。デステイは頭を掻くと、なのはの頭に手を置く。……この際、またやられるんじゃないかと、なのはがビクリと震えていたのだが、それはまた別の話である。

そして、軽く目を瞑り、『水』を掌に集中する。すると、デステイの右手が青い光に包まれ、それがなのはの中に吸い込まれていく。そして、デステイが手を離すと……

「……あ、あれ？　痛みが消えた。あと、ここ数日の疲れも」

「お前、毎日トレーニングでもやってたのかよ？　大分くたびれたぞ？」

頭の痛みが、いや、それだけじゃない。最近のジュエルシード搜索で疲れ切っていた筈の体が、すっかりと良くなっている。ちらりとデステイを見ると、呆然としているのはを呆れた眼差しで見つめていた。

「……何したの？」

「……ああ、なるほど。この世界に亜人はいねえのか」

「え、なに？」

あまりに声が小さくて聞き取れなく、もう一度聞き返すが、それをデステイは何でもないと行って掌を軽く振って誤魔化する。が、

(……おかしい)

なのはを誤魔化す事は出来なかった。

今のは、明らかにおかしい。まあ、頭痛に関してはそういうツボがある、という事で何とかなる。が、体に溜まった疲れは、その程度で取れはしない。更に、少しだけが見えた青い光。普通ではない。

(きつと、何かあるんだ)

さっきまでの怯え顔や泣き顔はなりを潜め、なのはは用心深くデステイを見つめる。もしかしたら、ジューエルシード、それでなくても、魔法か何かかもしれない。そう考えながら。

(……なんだ、こいつ?)

そんななのはの変化に気付き、デステイも目を鋭くし、威圧を籠めて睨みつける。その眼力に一瞬だけ怯むも、すぐに建て直し、反対に睨み返す。……重い空気が、二人の間を包み込む。

「……もしかして」

そして、なのはが口を開いた。デステイも、何があっても対応できるようにし、

「あなたも、魔法使いなの?」

がくりと、前のめりになってしまった。

「……えつと、ちょい待ち。何だ魔法って?」

「えっ、違うの!?!」

（寧ろ、何故そうだと思った？）

もしかして、少し頭の弱い奴なんじゃ……。そんな想像がデスティの頭の中に現れ、思わずなのはと距離をとった。

「えっ、何で離れるの？」

「い、いや、別に。……あ、俺用事思い出したわ。じゃあな、名無しのガキ……！」

「え、あ、ええ！？」

そのまま、脱兎の如く走り去っていくデステイを一瞬追おうとしたが、あっという間に離れた距離から自分では追いつけないと判断。追いかける事を諦め、

「私！！ 名無しじゃなくてなのは！！ 高町なのはだよ！！」

その背中に、大分遅れた自己紹介をするのだった。聞こえていたかは謎だが。

空は青から黒に染まり、数多の星が煌めいている。もう夜か、とデステイは思いながら、川原を歩くのを止めぼうつと星空を見上げた。あれから気晴らしに町中を歩き回り、そして、この町の地形を完全に把握した頃には、空はこのとおり、真っ暗になっていた。デステイの気分は朝ほど酷いものではなく、とりあえずの気分転換は出来た。……同時に、自らの現状の整理も。

（……信じたくはないが、ここはやっぱり、俺がいた世界じゃないな）

それが、この日デステイが出した結論だ。ここは、彼がいた世界に似てはいるが、それだけだ。科学力も大きく劣っていて、様々な実験で澱んでいたはずの空気が、ありえないほどに澄んでいる。更には、彼の世界で起きていた戦争、『ヒューマンズ・ウォー人種戦争』が存在していない。これは、幾らなんでもありえない。そして数時間前、デステイはこの異常に、『世界が違う』という結論をつけた。

参った。デステイは頭を掻き、空を見上げる。

空には、満天の星空が見えた。前の世界で見た星一つ見えない曇りだけの空とは違う、綺麗な夜空だった。それを見ていると、自分の

悩みがとてもちっけな物に見え、思わず苦笑してしまった。

「……何だかんだで、あのガキのお陰なのかもな」

少し遠かったため自信はないが、確か高町なのはといったあの少女。デステイが不良だと信じて疑わなかった彼女との接触が、デステイの荒んだ心に、ほんの少しだが、変化を齎したのだろう。

「今度あつたら、なんか奢ってやるか」

町で暴れていたチンピラからぶん盗った財布を取り出し、小さく微笑む。そして、再び空を見上げた。

——そして、世界は歪んだ。

「!? ……なんだ、これ？」

突然起こった異常。それは、一見何も変わっていないように見えたが、それはあくまで見た目だけだ。さっきまでこの町全体を覆っていた『気』が、突然、ここら一帯のみにしか感じられなくなったのだ。

「……違う。感じられなくなったんじゃない。世界が、今感じられる範囲で隔離されている」

じゃなければ、こんな事はあるえない。本来世界中を包んでいる『気』が感じられなくなったなんて異常の理由は、それと世界が終わったくらいしか浮かばない。が、世界が終われば当然ここにいる自分も終わるため、結局選択肢は一つしかない。

が、理由が分かったところで状況が好転するわけじゃない。デステイは舌打ちし、手がかりを求めて走り出した。

「クソ！ 最近こんなことばっかだ！！ ……ん？」

その時だった。デステイの耳に、何かが響いてきたのは。最初は空耳かと思っただが、こんな静まり返った空間の中で、それはありえない。なら、何だ？ 一度走るのを止め、耳をすませる。すると、さっきよりも大きな音が響き、それが爆音である事を悟った。

「……こんな街中で、誰がドンパチやってんだ？ まあいいや。もしかしたらソイツが犯人かも知れねえ」

バラバラにして燃やしてやる。物騒な事を口走りながら、デステイは音のした方向へと走る。9歳児の、いや、そもそも人間ではあり得ない速度でデステイは夜空の下を疾走した。そして、

夜空に輝く、金色を見た。

第2話『何偉そうに説教たれてんだ?』（後書き）

次回、この小説初のバトルパート。薄くなければいいんだけど……。

第3話 『締めはデメエにくれてやる』（前書き）

第3話。俗に言うバトルパート。相変わらずずっとすいバトルだ。

第3話 『締めはテメエにくれてやる』

空を舞う金色。それを金髪だと理解するのに、数秒ほどかかってしまった。

金色の髪。露出度の高い黒衣。世間で言う美少女に該当するであろう顔立ち。そして、金髪と共に夜の闇のなかで輝く、深紅の瞳。デステイは、そんな少女の事を知っていた。服装は大分違うが、間違いなく彼女だ。この世界に来て初めて出会った、自分の銀と対を成す、金の少女。

「……フェイト・テストロッサ？」

その少女、フェイト・テストロッサにその声は届かなかったらしく、デステイを見る事無く、ある方向に飛んでいく。その方向を見て――固まった。

その方向にいたのは、蛇だ。珍しい、純白の蛇。まあ、それだけならしい。問題は、その蛇が通常の蛇の平均的な大きさを優に超えていたところにあった。

全長10m。幅3m。目測だが、大きさはそんなところだ。デステイはふと、昔図書室で見た爬虫類図鑑を思い出した。図鑑に描かれていた蛇は、確かに大きいのもいた。が、それだつて3〜4mほどだ。あそこまでの大きさのモノは存在しないはずだ。ならば、この蛇はこの世界、下手すればこの町にのみ生息している大蛇なのかもしれない。

「……すげえな、海鳴市」

そんな不思議生物を作り上げた海鳴市に、感嘆の言葉が漏れた。

デステイがそんな妄想をしている間に、フェイトは空を疾走。一気に大蛇の目の前まで接近し、手に持つ鎌を振るう。が、大蛇は軽くよけただけで、それ以上のリアクションを見せなかった。

（……サイズが違いすぎる。接近戦は厳しいかな？）

思わず舌打ちした。が、よく考えれば当たり前の事だった。

フェイトの鎌、正確には鎌に付いた刃の大きさは、大蛇の頭の10分の1にも満たない。そんな武器で傷つけられたところで、大蛇にとっては蚊が刺したようなものだ。

ならば、と加速し、大蛇から距離を置く。同時に、フェイトの足元に金色の魔法陣が展開される。

『Photon Lancer』

鎌から発せられた機械音の後、フェイトの周囲に現れる四発の雷球。それを確認した後、フェイトは手を前に出し、

「——ファイア!!」

号令と共に、雷球——フォトンランサーを放つ。真っ直ぐだが、かなりの速さで飛んで行く雷球は、大蛇に命中。雷を含んだ爆発が発生し、大蛇の悲鳴が聞こえる。

が、これで終わるほど、フェイトは優しくはない。相手は、ジュエルシードの力で生まれた怪物なのだ。この程度で終わるはずがない。再びフォトンランサーを形成し、放つ。爆煙で前が見えない大蛇には見る事の出来ない攻撃。

（当たる！）

微笑を浮かべたフェイトの予想は——大きく、外れた。

大蛇は、その巨体からは想像も出来ないほどの俊敏さで地を這い、フォトンランサーを回避した。

「そんなっ!？」

驚愕するフェイト。無理もない。視界の悪い中での、あの高速攻撃は、どうやったって回避する事は出来ないはずだった。

——蛇には、ピット器官と呼ばれる器官が存在する。それは、赤外線を感じする機能を持つ、蛇の中でも一部の種しか持っていない、特殊な器官だ。

フェイトの不運は、ジュエルシールドが取り込んだ蛇が、たまたまピット器官を持っていたことだ。それによって、爆煙の中でもフォトンランサーの熱を感じ取り、回避行動をとることができたのだ。

「くっ!」

フォトンランサーを回避し、向かってくる大蛇を見て、フェイトは上空に上がる。如何に大きいといっても、所詮は陸の生物。制空権を持っているフェイトの方が、断然有利だ。突然体の伸びた大蛇を見て、フェイトはその考えを捨てた。

「っ!　そうか、ジュエルシールドの力で、こんな事まで出来るように……」

ジュエルシールドの効果がただ大きくなるだけだと思っていたフェイ

トにとっては、大きな誤算だった。これで、飛行というアドバンテージが失われ、ますます追い詰められていく。

（どうしよう……なんとか、この状況を打破しないと……）

あの機動力。伸縮自在の胴体。巨体。そして、くらってはいないが恐らくは高いであろう攻撃力。どれをとっても隙がない。バインドを使っても、あの巨体を止められるかどうか分らない。となると頼みの綱のサンダーレイジとフランクスシフトは使えない。あれは威力が高い反面、発動までに大きな隙が出来る。

必死で考えを巡らせるフェイト。が、これがいけなかった。

「■■■■■■■■■■！！」

「ハッ！ しまつ……」

次の瞬間には、フェイトは地面に叩きつけられていた。バリアジャケットがあるといっても、完全に防御できるわけではない。体中に激痛が走り、一瞬意識が飛んだ。

それを察したのか、それとも偶然か。口を大きく開けて飛び上がる大蛇。意識の戻ったフェイトはそれに気付くも、間に合わない。

（そんな……こんなところで……）

全てがスローモーションになる感覚。ゆっくりと迫ってくる大蛇。こんなに遅いのに、フェイトの体は動かない。

（い、いやだ……まだ、母さんに喜んでもらってないのに……）

動け、動けと体を叱咤するも、動かない。思考は普通の速さで行えるのに、体はそれについていけない。

そして、理解する。自分は、死ぬと。何もなせないまま、ここで死ぬと。

(……ごめんなさい、母さん)

そして、大蛇の口がフェイトを飲み込もうとし、

横から飛んで来た紅蓮の炎が、大蛇を包み込んだ。

「……え？」

状況が、理解できなかった。一瞬、アルフかと思ったが、違う。アルフは炎の魔法など使う事はできないし、そもそも、分かれて探索すると決めた際に、アルフはかなり遠い町にいたのだ。アルフの速度ではフェイトがジュエルシードの発見を確認した時間にここに向かっても、間に合わない。

なら、誰が？ 困惑するフェイトの耳に、足音が聞こえた。ちらりと見るとそこには、

「おお、燃えてる燃えてる。キャンプファイアーでも出来るんじゃないか？」

そんな暢気なことを口にする、銀髪の少年がいた。

「で、デステイ……？」

「んだよ、俺がデステイで文句あんのか？」

「そ、そんな事ないけど……」

でも何で、と続けようとして、フェイトは魔力の反応を感じ、大蛇の方を見る。見ると、燃えている大蛇の背に亀裂が走り、その中から白い巨体が飛び出してきた。それは、さっきまで燃えていたはずの大蛇だった。

「脱皮って奴か。じゃあ、炎じゃ少し面倒だな」

それだけ言うと、デステイは手を横に上げる。すると、デステイの手に橙の光が灯り、次の瞬間には、その手には1本の太刀があった。当然、その光景にフェイトは驚く。

（魔法！？……違う、魔法陣が出ていない）

どんな魔法でも、必ず初めに魔法陣が展開される。そこには何一つ例外はない。が、デステイのそれは違う。魔法陣が展開されず、そもそも魔力自体感知できない。なら、これは魔法ではない。

「さて、と。——殺戮ショーの始まりだ」

脚に力を籠め——疾走。高速戦闘の得意なフェイトですら目で追うのが精一杯という驚異的な速度で大蛇の目の前にまで接近し、太刀を一閃。その刃はやすやすと蛇の体を切り裂き、血飛沫が舞う。が、やはりサイズの違いは歴然。何事もなかったかのように尾を振るい、デステイを叩き潰さんとする。

が、デステイはそれに焦り一つ見せず、太刀を捨てる。すると再び橙の光が灯り、今度は3mほどはある大剣がデステイの手に握られる。本来なら持ち上げる事すらかなわないはずのそれを、デステイは軽々と持ち上げ、

「おらあ！！」

気合と共に、大剣を振るう。大きな風切り音の後に、大蛇の尾が切断され、宙に舞う。悲鳴をあげる大蛇に追い討ちをかけるように、デステイが再び走る。その手にはさっきまで握られていた大剣はなく、代わりに、大剣に劣らない大きさの棍棒が握られていた。それを野球のバッティングの如く振るい、大蛇を吹き飛ばす。2、3度地面をバウンドし、大きな飛沫を上げて、川の中に落ちた。

痛みに悶絶しながらも、自分よりも圧倒的に小さな存在に吹き飛ばされた、という屈辱に憎しみを籠めた視線をデステイに向け、

「——何見てんだ、テメエ？」

デステイの目を見た途端、その体を大きく震わせた。

圧倒的な敵意と殺意が、大蛇を恐怖のどん底へと突き落とす。斬殺、焼殺、撲殺。様々な死のイメージが大蛇の頭の中を横切り、

「■■■■■■■■■■！！」

急いで逃げようとする。が、それを許すわけもなく、デステイは大蛇の真上に跳ぶ。そして、デステイの周りに、大量の大剣が出現した。

「……蜂の巣だ」

それを掴み、投げる。雨の如く降ってくる大剣に、大蛇は体中を貫かれ、地面に縫い付けられた。そして、一発だけ外れていた大剣の柄に、デステイは着地する。

「チエックメイト、って奴か」

大剣から下り、ゆっくりとその場から離れるデステイ。それを見て大蛇は歓喜する。勝った、串刺しにされてはいるが、頭は刺されていない。ならば、今のうちに首を伸ばしてあの憎い小僧を飲み込めば自分の勝ちだ。早速、大蛇はその体を伸ばそうとし、

「……締めはテメエにくれてやる」

突如降り注いだ雷撃に、貫かれた。

「ジュエルシード……封印……」

がくりと膝をつきながらも、フェイトは目の前に転がるジュエルシードを見て、思わず笑みを浮かべた。遂に、遂に手に入れたのだ。

（これで、母さんも喜んでくれる……）

ジュエルシードを鎌——バルディッシュの中へと入れると、デステイに目を向ける。デステイはさっきの光景に目を丸くして驚いていた。……少し、可愛いと思ってしまった。

「あ、あの……ありがとう」

そこまで言つて、フェイトの視界はぐらりと揺れ、地面が近付いてくる。が、その前に首を掴まれる感触がし、ぐいっと引つ張られた。そして、視界が地面から夜空へと変わる。わけが分からないフェイトの視界にデステイが入り、フェイトを見下ろしている。

「まあ、あんだだけ強く叩き付けられりゃあ、そうなるだろ。寧ろ、よくその程度で済んだな？」

「うん。この服、バリアジャケットって言つて……あれ？」

途中で、ある疑問に気付く。なんでデステイは、自分が叩き付けられた事を知っているのだろう？ 思いつく結論に、フェイトは恐る恐る問いかける。

「……もしかして、見たの？」

「ああ、お前が勇ましく飛び出すところから、危つく蛇の餌となるところまで、全部な」

「……もつと早く助けてくれても、良かったと思うんだけど」

「助かったなら結果オーライだろ」

済ました顔で告げるデステイを、フェイトはやや頬を膨らませて睨みつける。その視線が癪に障ったのか、しゃがみ込み、フェイトの額にでこピンをかました。

「ツ~~~~~~~~!!?」

「何睨みつけてんだクソガキ。そもそもお前が雑魚過ぎるから、仕方なく出てきてやつたんだろうが。こんなんでも一応、命の恩人だからな」

「痛い痛い痛い!!! 喋りながらでこピンしないで!」

「はっはっは。痛いかな? そんなに痛いかな? その痛みは教訓だと」

「思え、クソガキ」

その後もフェイトにデコピンし続けるデステイ。段々と目に涙を滲ませるフェイト。それを見て邪悪な笑みを浮かべ、更に力を強めていくデステイ。そして、

「助けてアルフー！！」

「フェイトになにしてんだい！！」

ようやく駆けつけたアルフのドロップキックによって、デステイは川へと蹴り飛ばされた。

第3話 『締めはデメエにくれてやる』(後書き)

次回はデステイの力の説明だと思う。

……一ヶ月以内には、更新できるかなあ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9865t/>

魔法少女と銀の殺戮者

2011年10月8日13時07分発行